

Journey with spirits of universe

T△Y△M△

気の地層を辿る、立山・井波

立山
井波

旅と
ことばと
音楽と

Local Guide

富山
井波
南砺
砺波



GEO LIVE
ジオリブ研究所

Musica Otras Canciones
また、あるひとつの音楽

第2のふるさとを巡る旅・地域ものがたるアンバサダーが見つけた富山
2023年 Journey with spirits of Universe
富山 気の地層を辿る

制作:kawole／片岡薰(富山アンバサダー)、ジオリブ研究所
協力:地域アンバサダー推進協議会(JR西日本・他)
発行:地域ものがたるアンバサダー富山県チーム



note
地域ものがたるアンバサダーが
みつけた富山・福井・鳥取



地域ものがたるアンバサダー
～美食地質学×第2のふるさとを巡る旅～



GEO LIVE
ジオリブ研究所



Musica Otras Canciones
また、あるひとつの音楽

はじめて旅といえる旅をしたのは11年前。
メキシコへ一ヶ月、予定をまるで決めず
ここと足が向くままに歩き回った。
まだどまりたいのか、
もう次の町へ移動したいのか、
風の目を読むように
もたらされる新鮮な予感だけを頼りに。

旅の終わりに、
かつてアステカの神殿があった場所に立ってみた。
今でも大地が地下からおそろしい炎を
噴き上げてくるような、
そんなビジョンが見えた。

次の旅では南米大陸を太平洋側のペルーから
大西洋側のアルゼンチンまで
約5500kmを2ヶ月かけて縦断した。
アンデス山脈沿いに土地の音楽と
先住民の文化を追いながら、
どこまで行っても巨大な山と、
誰も足を踏み入れたことがないであろう
果てしなく神聖な場と赤い土に
自分の全存在が吸着され、
溶け去り、剥き出された。
マチュピチュへむかう中継地オリヤンタインボの山が
話しかけてきた。
「少しことにどまつてみないか?」

その雄大な山が見えるベンチで
どこにも行かず(というより魅惑され動けなかったので)
2日間ただただずっと座っていたある瞬間、
山が液体になって流れ出した。
流れ出したかと思うと、
溶け出された自分自身と山々が同じ流体になり
混じり合った。

悠久の時空間を流れながら、
自分たちと山は同じものだと教えられた。
流出し、興隆を繰り返し生きる生命体。
土地とわたしはつながっていた。

立山雄山。

森林限界を超えると鉱物の世界がひろがる、
雄山は標高3003mの山。

電鉄富山駅から立山駅、そこからさらに
バスとケーブルカーを乗り継いで
雄山登拝の拠点となる室堂まで。
8月のハイシーズンにもかかわらず天候はずっと悪く
雨が降りやしない日々が続いていた。
室堂へ到着してからも視界が悪く、メートル先が
真っ白で歩けないほどだった。
室堂山小屋の相部屋宿泊は
キャンセルが多くなったらしい
閑散とした食堂で夕食をとり、
大雨の音を聴きながらふとんにすべりこんだ。
「山と土地の神々が受け入れてくれたなら、
きっと登ることができるはず。」

午前4時に予感がした。
カーテンを開けると、
前日にはまるで目にすることできなかった周辺の
雄大な景色が目に飛び込んできた。
流れ出しながら迫り、
そびえる山々の流脈に
オリヤンタインボの山が重なり合った。
朝の太陽が雄山から昇り始めた。



雄山神社立山頂上 峰本社。標高3003mを登った先で宮司さんが待っている。

神々と人びとの祈りが交差する場所

立山

富山 気の地層、山

旅行とは場所の移動、
移動が(私に、そして同時に、場所に)残す痕跡だ。

動けば動くだけ、きみは新しい風景や音や人々と衝突する。
はっきりとことばで説明することはできないかもしれない、
でもこの無数の激しい衝突がきみに刻印する知識の量は膨大で、
それを整理するためには長い長い時間を必要とする。

きみは無意識の傷を深く負い、
また無意識の傷から癒えようとして戦うことになる。
バランスのための戦い?傷ついた木の幹からしたたる樹液が
成長させる瘤のように、きみは予想のつかない、見慣れない、
新しいかたちの自分自身を手に入れることだろう。

「狼が連れだって走る月」管啓次郎

立山開闢神話の伝承地、玉殿の岩屋。

「平安末期に越中守・佐伯有若宿禰が鷹狩りのために山に入ったところ
鷹が逃げてしまい、鷹を探しに山に入っていくと熊が現れ襲ってきたので、
矢を射かけた。熊は矢を受けたまま山中に逃げたので追っていくと、熊とみえたのは
阿弥陀如来で、その身には有若が射た矢が刺さっていた。
これを見た有若は菩提心を發し、弓を折り髪を切り沙弥となり、慈與と名乗った」
立山開闢神話
山頂の雄山神社ではこの縁起による鷹と熊が神社になっている。

雄山登拝への道は、土を作る植物群がないためガレ石の尾根を這いのぼる。
“道”は生命体が作る土があり、動物や人が歩くからできるのだ。
天候も変わりやすく、青空と絶景/真っ白なガスに覆われ視界を奪われる、が
繰り返される。時折吹きあげる強い風に体を支えながら慎重に歩を進めた。
平地にいる時よりも太陽が近いせいか、光は神々しさを増し、
まるで太陽そのものが強烈な視線を送ってくるようにも感じられる。
そして陽に照らされると温かさのおかげで緊張した身体もゆるみ、周辺にわずかに
咲いている高山植物や周囲の山々に視線を送りながら登り進めることができた。



登山道手前に祓社があるので必ず登拝前に立ち寄りたい。淨めの手水としてすぐ脇を小川が流れ出している。古来さまざまな人びとが祈りを置くように積んできたのであろう積み石が立山信仰の歴史を傳わせる。



米どころ富山と立山信仰のジオストーリー

巽好幸(ジオリブ研究所)

富山の地勢が見せる著しい特徴は、聳え立つ立山から深潭の富山湾まで、わずか50kmの隔たりに4000mを超える高低差があることだ。立山など3000mクラスの山々が連なる北アルプスが、日本の屋根と呼ばれるほどに盛り上がった原因の一つは、今から300万年前にフィリピン海プレートが運動方向を45度カックンと大変換したことである。その結果日本海溝が西向きへと移動を始めて、日本列島を東西方向に強烈に圧縮して「造山運動」が始まったのだ。もう一つ、北アルプスの世界トップクラスの隆起スピードには、マグマも一役買っている。立山など多くの火山が並ぶこの山地の地下では、まだ冷え切っていないマグマ溜まりに浮力が働いて、地盤を持ち上げているのだ。一方で富山湾が1000mを超える深海であるのは、ここはかつて大地を引き裂いた割れ目だったからである。実は日本列島は今から3000万年前はアジア大陸の一部だった。ところが大陸の下へ潜り込むプレートが引き起こしたマントル対流が大陸に断層を起こし、日本列島は太平洋へと漂移した。日本列島が現在の位置に落ちていたのはたかだか1500万年前のこと。この大変動によって、大陸と日本列島の隙間の地盤には亀裂が走って海底が拡大し、日本海が誕生した。その裂け目跡の一つが富山湾なのだ。こうしてできた「4000mの格差」こそが、富山特有の風土を育んだ根本的原因の一つである。例えば富山が国内屈指の米どころなのは、豪雪多雨の立山から富山平野を覆う広大な扇状地には、一面に水田が広がる。しかしこの大地は決して農耕に適した土地だった訳ではない。そもそもこの扇状地は立山火山の活発な活動によって噴出した大量の溶岩などが、地殻変動や大雨による崩落や侵食で削られ、それらが土石流となって運ばれて山麓に堆積した荒地だった。人々は一粒でも多くの米を得るために、不毛の大地を開墾整地して水田を作った。しかしこの急峻な地形は幾度となく大水害を起こし、その度に人々の命を奪った。水田の傍に並ぶお地蔵さんや水神碑には人々の鎮魂と安寧の願いが込められている。また人々は、豊かな水と土壤という恵みとともに土石流という試練を与える立山に対して、あちこちにおわすハ百万の神の中でも最大級の畏敬の念を抱いていたに違いない。このような人々の思いが、古くから御神体であった立山を、さらに神仏習合や密教の流れと相まって日本屈指の信仰の山へと昇華させたに違いない。富山は4000mの高度差が生み出す雄大な自然と豊かな山海の恵みから、住民の満足度ランクで上位を占め、国内外の観光客にも人気である。しかし富山が真に誇るべきは、その恵みと引き換えに被る大地からの試練に対して、山に祈りながら、ひたすらに生きるための闘いを続けてきた先人たちの苦みではなかろうか。



氷河期からこの地で命をつないできた雷鳥。
「火難除け守護神」といわれている。



天気のいい日には青空が湖面に映り、息をのむような美しさのみくりが池。
このすぐ近くに現在は立ち入り禁止となっている地獄谷がある。
まさに天界と地獄界が隣り合せになっているよう。

気の地層、人

井波

樹々と人びとのアウラが交差する町



町のあちらこちらにある木の看板。
それぞれの店主や家主の心意気を彫り出す木彫師たちの息吹を身边に感じられる。七福神やさまざまな猫など
井波の町歩きをしながら探すのが楽しい。



100年先の未来へ。木彫師の仕事をたずねて。

町に漂う香氣に、この町の様子はただごとではないなと歩き始め、出会ったのが木彫刻師三田南部白雲さん。
祖父の代から120年にわたる宗教美術の木彫専門家、欄間や仏像はもちろん、扇子、唐戸、隅龍、神鏡台、天蓋など
日本全国の社寺仏閣からの依頼で制作をされている。現在依頼されているいくつかの仕事の資料を見せていただいたのですが、依頼にまつわる文献や資料を探しからはじまり、サイズに合わせた設計デザインのスケッチを何度も何度もやり直し、墨で清書、同時に材料になる木を探し、彫り始めるまでに数ヶ月かかることが多かったのです。
貝や石が必要となるとそれを見つけてから見つけに地方を訪ね、仕事によっては大工や左官職人、銅器や鉢を扱う職人などの連携を取りながら、しかも、自分が理想とするものを作るための方向性が同じ職人であることが重要。

高野山奥之院の生身供で使われる「唐櫃」奉納プロジェクトでは、百年後の国宝とするべく日本全国26名の職人(鎌物師、金箔師、建具師、屋根葺き、彩色師、螺鈿師、漆塗師など)の方々と、今持てる最高の技術で最高峰のものを作るという、制作期間3年にわたるチャレンジがされた。

「ものそのものではなく
それを作る技術こそが伝統」
人の技術は使わなくなれば銷び、
やがて消える。

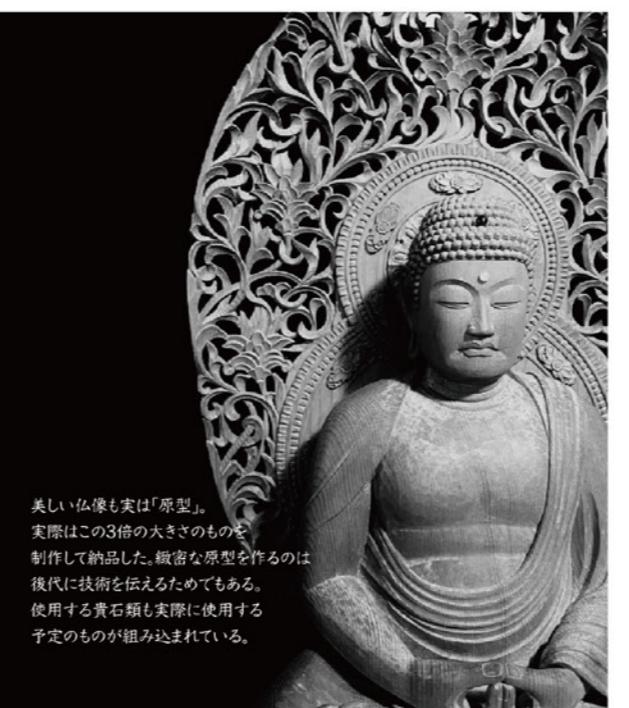
案内していただいた工房では、新湊の放生津八幡宮からの依頼で、枯れてしまった神木の松を使ってゆかりの大伴家持像を制作中。
こちらも倒れた松を乾かすのに3年、構想に1年。
ようやく彫り始めることができているのだそうだ。粘土で出来た「原型」や实物大の設計図も貼られ、工房内にはそのほか人体解剖図や大伴家持関連の本のページも開かれていて、ひとつの木彫作品に膨大な知識と時間を費やしていることが窺われる。



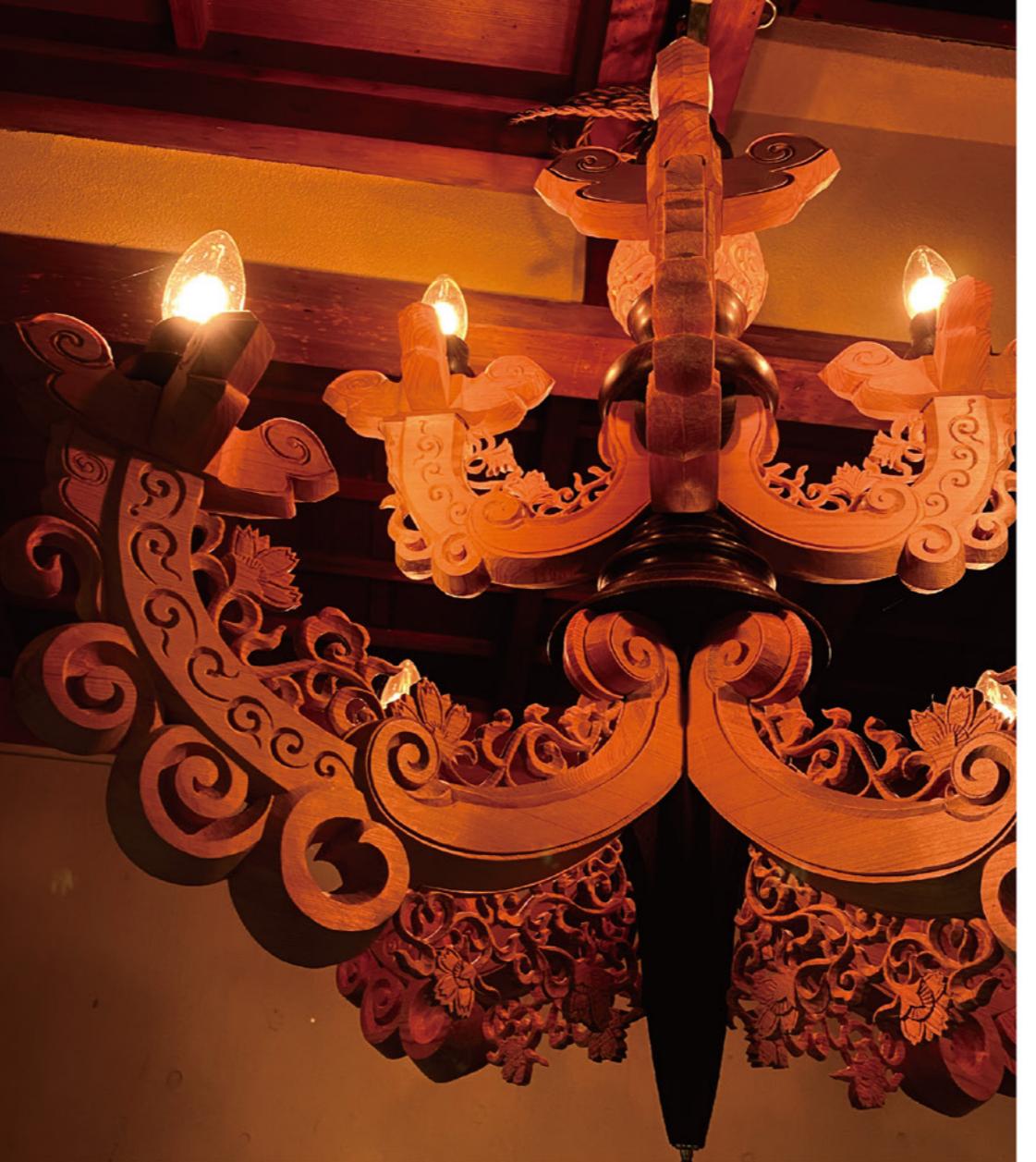
木が育つのに100年、
生み出されたものが次の時代へと100年。
町に到着した時に感じた木霊のアウラは、
人びとが真摯に木と対話し丁寧に取り扱っているからこそで、この工房でも、一度は枯れたはずの松の神木が夢のように香氣を放ちながら、
神聖なものが生まれて氣配に満ちていた。



蔵には三代に渡って残されてきた
設計デザイン面がぎっしり。



美しい仏像も実は「原型」。
実際に3倍の大きさのものを
制作して納品した。緻密な原型を作るのは
後代に技術を伝えるためである。
使用する貴石類も実際に使用する
予定のものが組み込まれている。



木のまち、井波の源流を辿って。

JR城端駅から井波へ向かうバスを降り、八日町通りを歩き始めた途端、どこからともなくやってくる香氣と、ノミで木を打つやわらかな音色に包まれ、町を取り巻く独特の気配にはっと意識が冴える。香りの正体はさまざまな種類の木の香りでまるで山から木霊が降りてきて集まり、かたちを成してゆくことの喜びに満ちているよう。



瑞泉寺

明徳元年(1390年)、本願寺五代綽如上人の開創による瑞泉寺。北陸各地からの寄進によって建立された歴史からも信仰の深さが窺える。宝暦12年(1763年)火災で焼失した寺の再建時に、京都本願寺御彫刻師前川三四郎が派遣され、地元の大工がその技を習得したのが井波彫刻の始まりである。現在は約200人あまりの木彫師が暮らす稀有な町。瑞泉寺本堂は明治18年に再建されたもので、木造建築としては北陸最大級である。各建物や太子堂の手狹など井波彫刻の特徴が終結している。井波彫刻の高度な技術は、その複雑な工程にも裏付けられており、仕上げまでに使われるノミと彫刻刀の種類は200本以上といわれる。木彫師たちは八日町通りを中心に軒を連ね、これらの先人の技を次代に受け継いでいる。



井波八幡宮

瑞泉寺すぐそばにある神社。境内はかつての井波城本丸跡に建てられ、井波城跡の石垣などが多く残っている。



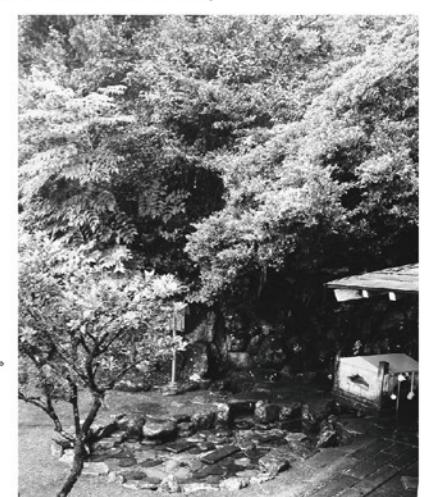
蚕堂

五箇山での養蚕、城端の絹織物業と、地域を支えてきた重要な産業である絹織物。かつて井波の町では盛んに引出が行われてきた。江戸時代末期(文久元年1861年)に蚕業にたずさわる人々が、生産の過程で失われてきた蚕の糸を吊る為に社を設け、蚕を祀った。建物としては、彫刻の町井波らしく、中国の古事記にならった精緻な彫刻が施された江戸時代末期にみられる神社本殿建築で、現在は覆い屋内部に納められている。



諏訪の大杉

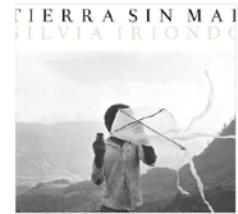
井波城の鬼門守護のため、諏訪明神を招聘して建てられた諏訪社。今はその場所に杉の木だけがのこされ「諏訪の大杉」と呼ばれている。井波城廃城後は井波八幡宮に合祀され、八幡宮の祭礼時には、神輿に祀られ今まで町内をまわっている。



瓜裂清水

瑞泉寺より徒歩15分、少し足を延ばした場所にある湧水。こちらも瑞泉寺と同じく、紳如上人の乗った馬の蹄が陥没した所から湧水が出たと伝承されている。庄川水系の湧水で、全国名水100選にも選ばれている。





「Tierra sin mal」
Silvia Iriondo

アルゼンチン歌手シリビア・イリオンドがグアラニ族の理念である「Tierra sin mal(悪なき大地)」に想いを馳せ、新しい古典のかたちを現出せざる、たたうようなコンテンポラリーピアノの調べで古い歌の旋律が融合した音世界。



「Casa de morar」
Renato Braz

特有のびやかさと牧歌的な旋律が特徴的なブラジル、ミナス・ジェライスより、豊かで芳醇な大地を彷彿とさせるハーネット・ブラスの歌声を。ちりばめられた音は柔らかく、そぞくブラジルの雨であり、風であり、大いなる癒し。



「Luz de agua」
Renato Braz

詩人フアン・オルティスの詩に自然豊かなアルゼンチン・パラナ在住の3人の音楽家が旋律を与え奏でる極上の一枚。電車にゆられながらの車窓の風景が、音の作用によってこの上ない輝きをもたらしてくれそう。



「Five leaves left」
Nick Drake

つまみかけたギターとつづやくような歌。1970年代フォークソングの名盤とされる一枚。ひとりの自由と解放感に寄り添う世界のちいさな哀しみも、発見もすべて身体に受け止めながら、木の葉のように舞い落ちる夢さも輝き。



「Schlafen」
Henning Schmiedt

旧東ドイツ出身のピアニスト、ヘニング・シュミートが描く星図のようなビアン・バッハのゴルトベルグ変奏曲を自身の解釈で組み上げた架空の星座のきらめきは、「眠りのための音楽」。楽器のすぐそばで集音された音の数々は、ピアノの内側で起きている楽器そのもののノイズとともにやさしくピースフルです。旅の夜に。



「伝説のフィーリン」
Cesar Portillo de la luz
ギューバ・フィーリンの伝説の歌手、セサル・ボルティージョ・デ・ラ・ルス。素朴なラテンの歌詞はメロウで優しく太陽が少し傾いた午後の喉の渴きを癒し、撫でてゆよう。ビールを飲みながら聴きたい一枚。



「SOUND ART BOOK
銀河ノコモリウタ」
Musica Otras Canciones
また、ある一つの音楽

「宮沢賢治」と「星」を結ぶをテーマに日本各地の自然が奏でてる音と、人々の声と歌で織られるオーディオビジュアルブック。アートワークには富山県美比美とシユリの安野谷昌徳をフューチャー。富山の多くの声や自然の風景の音色もふんだんに収録され、自然の中で耳をすましてるよなさやかな歌と音世界、星空を眺めながら。



「Bon Iver」
Bon Iver

ジャケのイメージから、もう既に旅が始まったかのような美しさ。少年のまなざしのよう、夢の中にいるような、コーラスとギター。ノスタルジックはただの懐かしさだけではなく、透明だった子ども時代の、世界に対する態度を思い出させてくれるものだと気付かしてくれる。

土地のものがたりを聴くために 旅とことばと音楽と。



「d design travel TOYAMA 2」
D&DEPARTMENT PROJECT

富山市にあるD&DEPARTMENTで出会ったトラベルガイド。現地を旅しながらほんとうにいいもの、いいデザインを富山各地から集めて紹介されています。伝統はもちろんですが、長く続いているもの、こと、その土地の特性をどうながら「観光・食事・買い物・カフェ・宿・人」のカテゴリーからレビューも掲載。D&DEPARTMENTらしい視点で土地からのメッセージを伝えたいという熱意に満ちた秀逸なデザインガイド。

日本語・英語併記なので外国人トラベラーにもぜひ教えてあげたい。



「呪師に成る—
イクストランへの旅」
カルロス・カスタネダ

ほんとうの旅人として生きたい人へ、バイブルのように読み繼がれてきたカスナーダのシリーズ。旅が日常に慣れ親しんだ生の意識をはぎ取るものとして機能するために。



「和食はなぜ美味しい
日本列島の贈りもの」
異好幸

この紙面でも記事を書いてくださったマグマ学者異好幸さんによる良書。日本の土地の成り立ちから紐解く美食地質学。日本の食文化の面白さを再発見すると旅は数倍面白い!



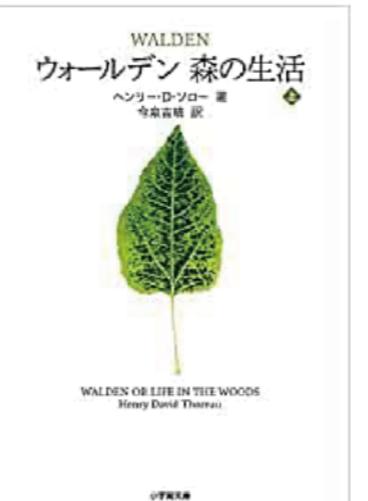
「天音」
古川日出男

初の詩篇はビートのようにことばが打ちつけられ、意味のレイヤーを軽々越えて怒濤のビジョンをたらす。ことばは音。退屈な待ち時間も長距離の移動も色々にあふれたものになるとこと間違いなし。



「狼が連れだって走る月」
(河出文庫)
管次郎

気の地層「立山」での引用はこの本から。旅の視点、生の視点そこからもたらされるもの、発見するもの、旅の可能性を考えない定住者は現実を変える力はない、定住の意味を知らない放浪者は頬廻に沈むだろう。あなたは狼のように、野生を生き抜けるか?



「ウォールデン森の生活」
Henry David Thoreau

古典ながら再評価されてきたソローの名著。森の中で暮らす淡々とした生活のなんといふ美しさ。「何もない」ということは、何ものもないということではない。何もないと見え、感じる視点の貧しさであり、実事、世界はきっとただただ美しく、日々の恵みは与えられているのだ。そんな最も重要なシンプルな生き方がからだとこころをつなぐようなまなざし。ハマると社会生活が営めなくなる危険もありそうですが、ふと立ち止まりたくなったら、こんな生き方があるじゃないと読んでみてほしい。

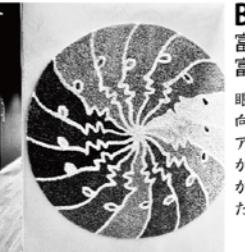
TONAMI
砺波

TOYAMA 富山



島川あめ店

富山県富山市古鍛冶町6-7
創業360年、薬都富山を長きにわたり支えてきた麦芽あめの老舗。今も変わらず釜とままで炊き上げるあめは地元でもファンが多い。一番搾り水あめのラベルは蛭谷和紙継承者河原隆邦氏の手によるもの。



BiBiBi&JURULi

富山県富山市木場町3-20
富山県美術館3F

眼下に富岩運河環水公園、大きなガラス窓の向こうに立山を借景しながら富山の食材と工芸、アートを「食」を通して感じるレストラン。広々と天井が高い空間には美術家安野谷昌穂のアート作品があちらこちらに配置され、「アート」と「イート」をたっぷり堪能できる。

TOYAMA Local Guide

nomi 井波



Baker's house KUBOTA

富山県南砺市市山見1713
井波に新しい風をと空き店舗を改装して2022年に開店。富山県内の生産者の小麦粉などの食材を積極的に使い、地域と深いかかわりを持ちながらもパンの品ぞろえにはルヴァン種ハード系パンもちらりと並ぶ本格派。

haiz coffee roastery

富山県南砺市本町3-35
クボタにほど近い場所にオープンした自家焙煎コーヒーの店。

南米コロンビアに特化したコーヒー豆をそれぞれの豆のボテンシャルに耳をすませてそれぞれの方法で発酵させるユニークかつオリジナリティ溢れる丁寧なプロセス。最上の豆を生かすべく浅煎りで仕上げられたブルボン種のコーヒーは、飲み進めるごとに味わいが変化しまるでワインのよう。コーヒーカップの素材にも地元元井波の土を使用し、土地と食に送る視点が心地いい。

1階は焙煎所兼コーヒースタンド。

2階は小さなカフェスペース兼ラボ。



季の実

富山県南砺市市山見1001

井波交通広場バス停を降りたらすぐの場所にあるギャラリーショップ。井波だけでなく富山の職人さんのさまざまな技が並んでいます。確かに審美眼で集められた品々から、富山らしい堅実さと古から脈々と受け継がれてきた美を感じ取ることができる。

立山・雨晴

TATEYAMA・AMAHARASHI



みくりが池温泉

富山県中新川郡立山町室堂平
立山に登れないでも室堂まで来たら是非立ち寄りたい場所。立山の生き生きした脈動を感じたい。

雨晴海岸
富山県高岡市太田
JR雨晴駅徒歩5分。タイミングが良ければ立山が臨める絶景が。すぐ前の道の駅雨晴では景色を見渡せるカフェも。

上記の場所はすべて鉄道やバスを乗り継いで徒歩で来訪することができます。来訪の際は必ず電話やメール等で営業日・営業時間の確認や見学の予約をお願いいたします。